台大日本語文研究第 42 期
2021 年 12 月，頁 23-39
2021-09-22 收稿，2021-11-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202112_(42).0002

庄野潤三「游泳池畔的小景」：著眼於作品中的性別不對稱

楊琇媚*

摘要

庄野潤三的代表作「游泳池畔的小景」被譽為「夫婦小說的集大成」。本論文透過性別的觀點探討作品的結構，得到以下的結論。

「游泳池畔的小景」表面上雖是一部描寫結縭 15 年的一對夫妻的家庭日常的作品，但實際上卻是以丈夫盜用公款而遭公司解雇的家庭危機為契機，使妻子察覺夫妻關係早已空洞，並讓妻子在內心自我反省的作品。而且，作品的大部分都是透過敘事者將焦點聚焦在妻子身上來敘述的手法也應證了上述的意圖。此外，彷彿在追究「青木夫人」未扮演好妻子角色的敘事方式以及不把丈夫盜用公款一事視為問題的另一面，把妻子的角色與責任提出來批評的描寫方式在在顯示出本作品中存在著性別的不對稱。

關鍵詞：庄野潤三、夫婦小說、性別、不對稱、盜用公款

* 南臺科技大學應用日語系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Junzo Shono's " Puurusaido Shoukei": The Focus of Gender Asymmetry in His Work

Yang,Hsiu-Mei*

Abstract

Junzo Shono's "Puurusaido Shoukei" has been named as "the collection of couple novel." This paper through the gender perspective discusses the structure of Junzo Shono's work and concludes below.

On the surface, "Puurusaido Shoukei" is about daily life of a couple married to each other for 15 years but in fact, the novel starts from the family crisis when the husband became unemployed after appropriating company money that resulted in the discovery of wife about the cold and hollow relationship in their marriage through her inner reflection. But most of this work was narrated with a focus on the wife to prove the said attempt. Additionally, the description on the role of "Mrs. Aoki" as a way to criticize the wife instead focusing on the appropriation of company money by the husband indicates the existence of gender asymmetry in the work.

Key words: Junzo Shono, the couple novel, gender, asymmetry, appropriation of company money

* Associate Professor, Department of Applied Japanese, Southern Taiwan University of Science and Technology

臺灣人文學學術期刊資料庫

庄野潤三「プールサイド小景」論
―作品におけるジェンダーの非対称性に着目して―

楊琇媚*

要旨

『群像』誌上に発表された「プールサイド小景」は、庄野潤三の「夫婦小説の集大成」とも言われている。本稿は、ジェンダーの視点から作品の構図をとらえることによって、次のようなことを明らかにした。

「プールサイド小景」は 15 年間も連れ添ってきた夫婦を描いた作品であるが、夫が会社の金を無断に使い込んだため解雇されたという家庭の危機を契機に、実際には夫婦関係は空洞化されていたことを妻に気付かせ、また、内省させる作品として読むことができると思われる。そして、そうした意図は、作品の大半が、妻に焦点化した語りによって語られていることからも裏付けることができる。ただ、「青木夫人」が妻としての役割を果たせなかった責任を追及するような一方的な語り方や、夫の使い込みが問題とされない一方で、妻の役割や責任といった問題が俎上に載せられている描写からは、本作品にジェンダーの非対称性が存在していることが明らかとなった。

キーワード：庄野潤三、夫婦小説、ジェンダー、非対称性、
使い込み

* 南台科技大学応用日本語学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

庄野潤三「プールサイド小景」論
―作品におけるジェンダーの非対称性に着目して―

楊琇媚

一、はじめに

1954 年 12 月に『群像』誌上に発表された「プールサイド小景」は、庄野潤三の代表作の一つに数えられている作品である。そして、庄野の「夫婦小説の集大成」[1]とも言われているこの作品は、会社の金を無断に使い込んだため、突然に解雇されてしまった主人公である青木弘男が、水泳の練習をしている息子たちをプールサイドで眺めるところから物語が始まるというように、いわば、彼が無為に過ごした 10 日間を描いたものである。

また、同作品は、芥川賞も受賞しているが、その評については、第 32 回芥川賞の選後評において、井上靖は「『プールサイド小景』はきめのこまかい、いい作品である。(中略) 氏の作品ではこの作が一番成功してゐると思ふ」[2]と、高い評価を下している。また、瀧井幸作も同じく選後評にて、「サラリーマン生活の不安、その細君の油断の心持など、サラリーマン生活の弱点を衝いたテーマで、(中略) この短篇は、うま味が多い。読みながら不安の心持が惻惻と迫つて、やはらかい美しい文章で、香気のやうなふくいくとしたものがある。手法も、心にくいやうな、立体的に新鮮に目に映る、映画のモンタージュのやうな巧妙な所がある」[3]と、好意的なコメントを寄せている。

さらに、その後においても、妻の「自己性」に焦点を当てること

---

1 助川徳是「庄野潤三の人と作品」(『鑑賞日本現代文学 29』角川書店、1983.10) p 308- p 309。
2 瀧井孝作・佐藤春夫・他「芥川賞選後評」(『文芸春秋』1955.3) p 288。なお、旧字体を新字体に改めた。
3 前出「芥川賞選後評」p292。なお、旧字体を新字体に改めた。

臺灣大學學術期刊資料庫

により作品世界に働いている「防衛機制」を探究する後藤聡子の論考[4]や、「〈語り〉によって妻が焦点化される」ことや「妻の就労の可能性」が「無視される」ことなどの問題に注目することで作品に対する「今日的な評価」を行った遠藤伸治・有元伸子の論文[5]などが存在している。また、チェーホフの笑劇「コーラス・ガール」と比較研究を行った村手元樹の論文では、「プールサイド小景」が庄野の「夫婦小説」の最後の作品と見なされており、「小説で描く家族の年代が概ね実人生に沿って上がっていく庄野において、次第に夫婦中心の世界ではなく子どもにその視点が向けられていき、「家庭小説」へと進展していくのだが、「プールサイド小景」はその転換点に位置する」といった形で、本作品の位置づけが行われている[6]。

こうした同作には、先に挙げた主人公である青木弘男のほか、会社を解雇されたことを夫から告げられてショックや驚きの気持ちを抱えた主人公の妻も登場する。そして、作品中には、フランス映画の女優を思わせる顔立ちの女性が経営するバーに通い、その女性と一度デートしたという夫の話を聞いて、妻が「〈女がいる。夫が大金を使い込んだのは、女のためだったのだ〉」（p288）と思う描写があり、妻は夫の犯罪の背後に女がいることを直感している。だが、彼女は事件の真相を夫に問いただそうとはせず、それどころか、「メデューサの首。／彼女はそれを覗き見ようとしてはならない。追求してはならない。そっと知らないふりをしていなければならないのだ」（p289）との語りから、彼女は真相を知ることに恐怖を抱いていることが察せられる。また、彼女は「夫が話し終わると、さり気なく、その種の告白を切り上げさせ」（p288）たため、結局、この真相は明

4 後藤聡子「庄野潤三論－〈見せ消ち〉と〈防衛〉」(『国文学解釈と鑑賞』2006.2)
5 遠藤伸治・有元伸子「庄野潤三「プールサイド小景」論－サバイバルとコミットメントをめぐって－」(『国文学攷』2009.12)
6 村手元樹「庄野潤三「プールサイド小景」論－チェーホフの笑劇「コーラス・ガール」との比較を軸に－」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化編）2017.3）p 198。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

かされないままになっている。そのため、結果として、彼女は疑念や不安に苦しめられるままになっている。こうした点について、遠藤・有元は、「夫の姿勢には大きな矛盾がある。夫はすでに、使い込みや餓首という恐ろしいことに妻を直面させ、妻が何も知らなくても安心していられる状況ではないようにしてしまったにもかかわらず、相変わらず妻に情報を十分に与えない」[7]という指摘を行っている。

以上、注目した点を踏まえ、本稿は、夫の矛盾した姿勢が何を意味しているのか、なぜ夫が真相を語ろうとしないのか、また、なぜ作品には真相が描かれていないのかといった疑問を出発点として、ジェンダーの視点から同作品の構図をとらえることで、作品の読みに新たな視座を開くことを試みたい。

二、孤立する戦後の核家族

「プールサイド小景」における主人公の家族の構成は、夫と妻、そして小学 5 年生と 4 年生の息子が二人いる 4 人家族である。そして、夫は職業労働（サラリーマン）、妻は家事・育児（専業主婦）という形で性別役割分業された、いわば典型的な核家族である[8]。

戦後の日本では、都市化が急速に進み、高度経済成長を背景にサラリーマンが増え、その夫の収入が増加することで、妻の専業主婦化が促されたとされている。作品の青木一家も、こうした時代背景に沿って造形されたのは言うまでもなかろうし、まさに今述べたような「家族の戦後体制」[9]を反映しているものでもあると考えられる。ちなみに、夫婦二人が「藤棚の下のテラスに持ち出したデッキ・チ

---

7 前出「庄野潤三「プールサイド小景」論－サバイバルとコミットメントをめぐって－」p 33。

8 三浦展によれば、日本では、「1955 年から 1975 年にかけて、核家族化が非常な勢いで進んだ」という。(『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』講談社、1999.12）p 125。

9 落合恵美子による言葉である。(『21 世紀家族へ――家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣、1994.4）p 79。

臺灣大學學術期刊資料庫

ェアーに身体を横たえて、向かい合っている」（p277）といった描写から、青木一家は一戸建てに住んでおり、また、作中には青木が会社の金を使い込んだことに関連して「本来ならば家を売ってでもその金を弁償しなければならないところだけれども」（p278）との描写もあることから、その住まいは青木の持ち家であることが分かる。つまり、青木一家は「郊外に芝生の庭のある一戸建て住宅を買う」[10]といった「戦後の大衆の共通の夢」[11]を実現したのである。では、こうした戦後の家族が、いかに弱体化されたものであったのかについて、以下で論じたい。

マイホームを持ち、「課長代理をしている」（p276）夫と「快活な奥さん」（p278）である妻、そして元気な二人の男の子からなる青木一家は、いかにも絵に描いたような明るく理想的な家族である。ところが、こんな青木一家は、ある日、崩壊の危機に晒される。それは、一家の大黒柱である青木が、1 週間前に「十八年も勤めて来」（p278）た会社から「呆気なく」（p278）解雇されたからである。そして、これから青木一家に襲い掛かるであろう経済的な不安について、作品では以下のように描写している。

> 生活費はあと二週間でなくなってしまう。彼らの預金通帳は、ずいぶん前から空っぽである。夫婦とも入ったら入っただけ使ってしまう性質なのだ。すると、その後は売り食いでつないで行くより外ない。半年くらいは何とかもつだろうか。（p289）

日本的経営の三本柱[12]の一つである終身雇用制度は、第二次世界大戦後の日本の企業において「より広汎に発達していった」[13]と言われている。そして、青木夫婦が「夫婦とも入ったら入っただけ使

[10] 前出『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』p 18。
[11] 前出『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』p 18。
[12] 終身雇用・年功賃金・企業別組合のこと。（落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川学芸出版、2000.10）p 154。
[13] 宮坂純一「終身雇用とは何だったのか」（『社会科学雑誌』2015.12）p8。

臺灣大學學術期刊資料庫

ってしまう」（p289）のは、終身雇用制度の下で、生涯にわたる生活の安定や保証が得られるとの思いからくるものと推測されよう。さらに、「やはり勤めの厳しさというものを夫が身に沁みて感じることがなかった」（p280）という妻の語りから、青木が会社のことを甘く見ていたことがうかがえる。

そして、こうした甘さや慢心を持つ「四十にもなって勤め先を放り出された」（p280）青木は当分は新しい職を見つけることは難しいだろう。しかも、妻の実家は「戦後はすっかり逼塞してしまっている」（p289-p290））し、夫の方も「兄弟三人いるが、みな似たりよったりのかぼそい役所や会社勤めの身である」（p290）ため、「二人ともまるで天涯孤独の身も同然である。どこにも身を寄せるところがない」（p290）という状況である。とすると、妻が外に出て金を稼いでくるよりなすすべがないだろう。ところが、妻の就労の可能性について、語り手は次のように述べている。

> 子供がいなければ、何とかまだ暮しを立てる方策があるかも知れない。自分が働きに出て、ともかく自分一人の口を糊することはできないことはないと思う。それも、身に何の技術も持たない彼女には、よほどの覚悟が必要に違いないが。しかし、小学校に通っている男の子が二人いては、それは到底出来ない相談である。（p290）（下線は論者による。以下同様。）

遠藤・有元は「当時でも既婚女性の一割は働いており、二人の子どもも小学四年生と五年生と、学童保育などの施策の不備とは関わりのない学齢に達している。夫が無収入な状況では、妻が働くことも少なくとも選択肢の一つに数えられる」のに、なぜ「妻の就労の可能性は『到底出来ない相談である』と無視されてしまう」のかと指摘している[14]。確かに、二人の息子は、学童保育を必要としない

[14] 前出「庄野潤三「プールサイド小景」論ーサバイバルとコミットメントをめぐってー」p 32。

臺灣大學學術期刊資料庫

学齢に達していると言える。では、下線部に示されるように、妻が働きに出ることができないのは子どもがいるためだ、とはっきりと言いきっているのは、どういう理由や意図によるものなのだろうか。この点について、やや、うがった考え方を示せば、彼女は、今の夫に子供たちを預けて安心して働くことは出来ないと考えているため、自分が働くことは「到底できない相談」であるという結論に至ったのではないだろうか。言い換えれば、かつて会社人間であった夫は「毎晩、帰宅が十二時近く、それよりもっと遅くなって車で帰ってくることも度々のことであった」（p278）ため、子育てをうまくこなせるはずがないと語り手は考えているのである。このように見てくれば、戦後に定着した核家族の特徴の一つである性役割分業が、青木一家が直面する経済的問題の解決を阻害するものになっていると考えられるのである。

戦後に定着した核家族といった家庭のあり方について、牟田和恵は、「戦後の都市化と高度成長」のため、「家族を支えるさまざまなサービスが市場化・社会化され、ますます地域・親族の共同体の意味は薄くなり、個々の小家族は外部から分離・独立して生活を営むことができるようにな」ったことで[15]、小家族の独立性（孤立性）は、ますます確固たるものとなっていった[16]と述べている。青木一家が孤立状態に陥ってしまったのは、このような同時代の社会状況のあり方に起因していると考えられる。なぜなら、頼れる隣人や親族がいれば、少しは手助けをしてもらうことも可能であるし、また、放課後に子どもを預けられるなどの近所の助けがあれば、妻も働きに出ることができたはずだからである。

さらに、「近所の人たちの中に、何となく疑わし気な眼で青木氏を見るものが出てきた」（p296）や、「買物に行った先で、彼女に向って探りを入れるような質問をした奥さんもいた」（p296）といった描

[15] 牟田和恵「変貌する家族」（石川実他編『ターミナル家族』NTT 出版株式会社、1993.4）p 14。
[16] 前出「変貌する家族」p 14。

臺灣大學學術期刊資料庫

写をふまえるならば、青木一家は単に孤立しているだけでなく、近所の目を気にせざるを得ない息苦しい状況に置かれていることも分かるのである。

三、甘える夫／ケア役割を求められる妻

作品では、夫が解雇されたことを知った妻は、そのことについて彼を表立って責めることもなく、ただ、夫の性質や性格を見過ごしてきた自分のうかつさを責めたり、悔やんだりする場面が多い。この点について、後藤聡子は「彼女は妻という役割に固執することで、そしてその役割コントロールを十分に発揮できなかった自らの落ち度として夫の失態を捉えることで、夫の抱え込んだ闇に踏み込むことを回避している」[17]と指摘している。だが、果たして妻は、本当に「夫の抱え込んだ闇に踏み込むことを回避している」のであろうか。この点について、少し考えてみたい。

「青木夫人」（p276）は「課長代理にまでなっていてくびにされた夫が俄かにぼんやりした、智慧のない人間に見えて」来ている（p280）にもかかわらず、「裸になってプールへ入る元気など、全く無」（p281）くて、「ただもう畳の上に長い手足を投げ出してへたり込んでいるばかり」（p281）の夫を「気晴しに」（p281）「水泳パンツとケープを持たせて家の中から出させた」りしている（p281）のである。そして、彼女は「どんなきれいなひとのいる店で、あなたがばかなお金を使ったのか」（p284）と、夫が通ったバーの話を冗談めかして聞き出そうとしている。もっとも、結果として彼女は、無心に設けてしまった「陥穽」（p289）に陥ってしまったのであるが、ただ、上述した描写からは、妻としての役割や責任を徹底的に果たそうとしているとも言えるように思われる。さらに、彼女は、今現在、自分や自分たちが遭遇している不幸について、次のように語っている。

[17] 前出「庄野潤三論－〈見せ消ち〉と〈防衛〉」p 91。

臺灣大學學術期刊資料庫

何時、どういうわけで、こういう変化が自分の上に生じたのだろうか。どうして出し抜けに、自分たちの生活の運行に狂いが出来てしまって、それでこのようないわれのない苦痛と恐怖を味っているのであろうか。どういう神が、こんな理不尽な変化を許したのか。（p290）

言うまでもなく、彼女のこれまでの平穏な生活を崩した張本人は夫である。だが、彼女は夫をそれほどとがめることもなく、むしろ、今回の出来事によって、当たり前になってしまっていた夫によってもたらされてきた豊かな生活が、一瞬にして崩れていったという、いわば、人生のはかなさに気付かされたような思考を、われわれ読者に示すのである[18]。以上のように、一貫して、夫の過ちを責めることのない彼女の姿は、まさしく「献身的な妻」[19]そのものと言えよう。では、このような「献身的な妻」の姿勢や思いは、本当に、夫が抱え込んだ闇に踏み込むことを回避したことから現れたものなのであろうか。こうした点について考えるために、まず、夫がある晩、ウイスキーを飲みながら「会社勤めのつらい思い」（p293）を妻に語る場面に注目してみたい。

あたりに人気のない時に、不意に白いものが通るのを見かけると、僕はどきんとする。その感じはどう云ったらいいだろう。何か魂みたいもの――へんに淋しい魂のようなものなんだ。（中略）／彼等を怯えさせるものは、何だろう。それは個々の人間でもなく、また何か具体的な理由というものでもない。<u>それは、彼等が家庭に戻って妻子の間に身を置いた休息の時にも、なお彼等を縛っているものなのだ。それは、夢の中までも入り込ん</u>

[18] 類似した考えは「最初の衝撃が通り過ぎたあと、彼女の心に落着きが取り戻された。すると、何の不安も抱いたことのなかった自分たちの生活が、こんなにも他愛なく崩れてしまったという事実に、彼女は驚異に近い気持を感じた。／それは、見事なくらいである。／（人間の生活って、こんなものなんだわ）」（p 279）といった描写からもうかがえる。

[19] 前出「庄野潤三論－〈見せ消ち〉と〈防衛〉」p91。

で来て、眠っている人間を脅かすものなのだ。もしも、夜中に何か恐ろしい夢を見てうなされることがあれば、その夢をみさせているものが、そいつなのだ。（p291-p293）

やや長い引用となったが、上掲の描写は、青木の会社勤めに対する不安や苦痛を訴える重要な個所である。ここでは、「彼等」という三人称が比較的に多く使われているが、むろん「彼等」の中には青木自身も含まれている。そして、下線を付した部分の描写からは、サラリーマンの抱く不安や苦痛の原因の一部は、経済的責任を夫である自らが一人で背負わざるを得ないといった、いわば家庭に対する重荷に起因したものであることが分かる[20]。

そして、夫が毎日そのような気持ちで会社に出勤していたことを思い知らされた妻が、自分自身に非を見出した様子を、作品では次のように描いている。

夫の話を聞いてみると、夫が会社を終ってから用がない時でも真直ぐに帰宅しないのは、勤めていることに対して終始苦痛を感じていたからだと云うことが、彼女には分った。家へ帰っても、心の休息を得られなかったのだろうか。妻や子供たちを見ると苦しくなって、バアやキャバレエで女と一緒にいると苦痛を忘れるというわけなのだ。／そうすると、いったい自分は夫にとってどういう存在なのか知ら？　彼女の心には、そんな疑問がふと生じる。あたしたち夫婦で、お互いに満足し、信頼し合っていなかったとしたら、あたしは何をしていたのだろうか。（p294）

[20] こうした点を裏付ける内容として、青木が同僚の話を引き合いにして「うちのかあちゃんがゆんべも泣いておれのことを口説くんだ。どうかお願いだから短気起こさないで、月給は安くて今のままのぴいぴいでも我慢するから、決して早まったことしないで後生大事に勤めておくれよって。そう云って泣きやがるんだ。おれもつい考え込んじゃったよ」（p293）と語った描写がある。

臺灣大學日本語文學系

妻はかつて「毎晩、夜中になるまで帰って来ない」（p294）夫を「ただ遊び好きの人間」（p294）だと思い込んでいた。しかし、夫の告白を聞いた後、疲れきった心の休息を家で得ることができない彼が、バーやキャバレーに行って、そこの女性と一緒に居ることで、慰めや励ましをもらっていたのではないかと、一応は、夫の行為に納得する。しかし、一方では、上の引用に見るように、夫における自分の存在意義や存在価値に疑問を抱き、自分は“妻失格”ではないかと思う、彼女の自己反省の姿勢もうかがうことができる。

このように、夫が 15 年間も心の中に隠していた「会社勤めの不安や苦痛」（p294）を知ることとなった妻は、「男が毎朝背広に着換えて電車に乗って遠い勤め先まで出かけて行き、夜になるとすっかり消耗して不機嫌な顔をして戻ってくるという生活様式が、そもそも不幸のもとではないだろうか」（p295）と考えるようになり、サラリーマンとしての夫への同情的な眼差しを向けるようにもなる[21]。言い換えれば、夫の不安や苦痛に深く共感できたからこそ、彼に同情的な眼差しを向けることができるようになったのではないだろうか。

以上、見てきたように、妻は、後藤が指摘したように「夫の抱え込んだ闇に踏み込むことを回避している」のではなく、むしろ、夫が背負っている仕事や家庭の重圧を知り、その結果、彼の痛みに深く共感する姿勢を見せるようになった。さらに、彼女は、夜になっても眠れない夫に対して、「自分の睫毛のまたたきで相手の睫毛を持ち上げ、ゆすぶる」（p296）といった「愛撫の方法」（p296）で慰めようともしている。また、10 日間経過しても出勤のふりをせざるを得ない青木が外をぶらつく惨めな姿を想像したり、「（危ない！

[21] ほかにも、「最初の日。夫が出かけて行くと、彼女はなんとなくぐったりしてしまった。彼女の心には、夫が晩夏の日ざしの街を当てもなしに歩いている姿が映る。雑沓の中にまぎれて、知った人に出会うことを恐れながら、おぼつかない足取りで歩いている夫の悩ましい気持が、そのまま彼女に伝わって来るのだ」（p297）といった、夫の痛みに共感し、同情を示すような描写がある。

臺灣大學學術期刊論文

そこへ行ってはいや。いやよ、いやよ、いやよ……（中略）／（いけないわ。そこへ行ったら、おしまいよ。おしまいよ。）」（p297）というように、夫が擬似浮気相手の所へ行こうとしている場面を想像したりもしている。そして、彼女は「失業者だって何だって構わない。この家から離れないでいてくれたら……（中略）／（帰って来てくれさえすれば……）」（p298）と考えたりするようになり、結局、彼女が夫のことをすべて許すという結末で、この作品は締めくくられている。

つまり、夫は、使い込みの真相を、終始、妻に打ち明けることなく、15 年間も我慢してきた会社勤めの不安や苦痛を気の毒そうに、または悲しそうに語ることによって、妻に慰めを求めたり、彼女の同情を喚起しようとしたりしている、とみることができよう。そして、ここには、夫があたかも過ちを犯した子どものように妻に「甘え」、妻もまた、母親のような無条件の「愛情」でそのような夫を包み込む、という関係を見て取ることができる。言い換えれば、男は「甘え」[22]、女は「ケア」する、という形で、青木夫婦の関係をとらえることができると思われるのである。

四、結びに代えて

既に後藤によって指摘されているように、「青木夫人」は“妻”という役割に強くこだわっており、「彼女の意識はあくまでも、妻としての役割を十分に果たせなかったものとしての自分へと向か」[23]っている。だが、作品を詳細に読んでいくと、“妻”という役割にこだわっている彼女の心境が、微妙に変化していることが分かる。例えば、夫が解雇されたことを知った当初の彼女は、夫のことを一度も

[22] 中尾香は戦後『婦人公論』に現れた男性像を分析し、「女性に甘える男性像」は「それまでの伝統的な男性像と真っ向から対立するものであり」、「戦後になってはじめてあらわれたまったく新しい男性像」または「初めて公然と姿を見せた男性像である」と指摘している（「甘える男性像―戦後『婦人公論』にあらわれた男性像―」（『社会学評論』2003.6、p67）。

[23] 前出「庄野潤三論―〈見せ消ち〉と〈防衛〉」p91。

臺灣大學圖書館典藏

疑うことのなかった自分のうかつさを反省したり、夫の性質を見過ごした自分を責めたりするのみであった。しかし、夫に女がいるらしいことや、彼がサラリーマンとしての不安を抱えていることなどを知った後、彼女は、これまでの夫婦関係を反省したり、夫への同情を感じたりするようになる。つまり、彼女は、妻として求められていたケアの役割が、これまで欠けていたことに気付かされたのである。一方で夫も、会社の金を使い込んだことで解雇されたのをきっかけに、これまで抑圧してきた会社勤めの不安や苦痛といった心の内を、妻に打ち明けたのである。そして、そうすることによって、妻に甘え、彼女に精神的なケアを求めるのである。

「プールサイド小景」は 15 年間も連れ添ってきた夫婦を描いた作品であるが、夫が会社を解雇されたという家庭の危機を契機に、実際には夫婦関係は空洞化していたことを妻に気付かせ、また、内省させる作品として読むことができると思われる。そして、そうした意図は、作品の大半が、妻に焦点化した語りによって語られていることからも裏付けることができる。ただ、「青木夫人」が妻としての役割を果たせなかった責任を追及するような一方的な語り方や、夫の使い込みが問題とされない一方で、妻の役割や責任といった問題が俎上に載せられている描写からは、本作品にジェンダーの非対称性が存在しているのではないかと考えられる。

以上、本稿では、作品におけるジェンダーの非対称性を焦点に当てることにより、夫の使い込みの過ちがすり替えられ、それに代わって妻の役割や責任の問題が俎上に載せられているという本作品の構造を明らかにしてきた。今後の課題として、「プールサイド小景」以降の「家庭小説」も視野に入れて研究を深めていきたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

【付記】本稿は台湾日本語教育学会主催の「2017 年台湾日本語教育国際シンポジウム」における発表内容に加筆・訂正を施したものである。

【テキスト】

庄野潤三（1973）『庄野潤三全集　第一巻』講談社

【参考文献】

瀧井孝作・佐藤春夫・他（1955）「芥川賞選後評」『文藝春秋』文藝秋春

阪田寛夫（1975）『庄野潤三ノート』冬樹社

助川徳是（1983）「庄野潤三の人と作品」助川徳是編『鑑賞日本現代文学 29』角川書店

牟田和恵（1993）「変貌する家族」石川実他編『ターミナル家族』NTT 出版株式会社

落合恵美子（1994）『21 世紀家族へ―家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣

山田昌弘（1994）『近代家族のゆくえ―家族と愛情のパラドックス』新曜社

三浦展（1999）『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』講談社

落合恵美子（2000）『近代家族の曲がり角』角川学芸出版

中尾香（2003）「甘える男性像―戦後『婦人公論』にあらわれた男性像―」『社会学評論』第 54 巻 1 号

後藤聡子（2006）「庄野潤三論―〈見せ消ち〉と〈防衛〉」『国文学解釈と鑑賞』第 71 巻 2 号

遠藤伸治・有元伸子（2009）「庄野潤三「プールサイド小景」論―サバイバルとコミットメントをめぐって―」『国文学攷』 第 204 号

宮坂純一（2015）「終身雇用とは何だったのか」『社会科学雑誌』第 13 号

臺灣大學學術期刊資料庫

村手元樹（2017)「庄野潤三「プールサイド小景」論――チェーホフの笑劇「コーラス・ガール」との比較を軸に――」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化編)』第 8 号

臺灣大學學術期刊資料庫